

認知理論における日本語の仮定表現*

竹 鼻 圭 子

0. 序

日本語における仮定表現は、英語等のいわゆる仮定法とは異なり、一般にひとつの文法上の範疇としてとり挙げられることが少なく、活用形や語の意義の領域の内に分散している。しかし、次に挙げるような接続助詞あるいは助動詞の仮定形活用と呼ばれる形態素を中心とし、確定しない事象を前件とする接続表現は、広く典型的な仮定表現として意識され、使用されている。

(1) S_1 ト S_2 、 S_1 バ S_2 、 S_1 タラ S_2 、 S_1 ナラ S_2 、 S_1 テモ S_2

これらの形態素は、渡辺実 (1971) はじめ、品詞論的には多くの議論がなされてきたし、久野暉 (1973) に見られるような細かい観察もなされてきた。日本以外でも Bloch (1946)、Alfonso (1966)、J.Hinds&W.Tawa (1975) 等により議論されてきているが、⁽¹⁾「仮定」とは何かという根本的な問題はとり挙げられて来なかったように見うけられる。ここでは、(1)に挙げた形態素を含む文全体、すなわち、「 S_1 __ S_2 」という構造全体をとり挙げ、 S_1 と S_2 間の論理関係及び文脈 (context) との関係に焦点をあわせ、こういった仮定表現の一般化を試みたいと思う。

なお、(1)に示された形態素を含む文の中には、 S_2 の時制が過去であるものがある。たとえば、

(2) 駅に着 { いタラ } 電車はもう出ていた。
 { くト }

のように時間的に継起する事象を接続している場合や、

(3) もう一時間早く来て { いれば } 間にあったのに。
 { いタラ }
 { いタナラ }

のように「-のに」や「-のだが」を伴って反事実を表わす場合である。(2)のような時間に関係する表現は、(1)にある形態素すべてに共通する用法ではないので、ここでは S_2 が過去の形をとる場合は除いて考えていくことにする。

1. 文脈と假定表現

各形態素に固有な論理関係および文脈との関係を順次述べてゆくのであるが、その前になぜこういった視点に立って假定表現を論じることには意義があるのか考えておきたい。

次の例文にあるように、(1)にある形態素を含む假定表現は、談話 (discourse) を始める文となることはまずないようである。

- (4) 雨が降ると、ぬかるむ。
- (5) 雨が触れば、水不足も解決する。
- (6) 雨が降ったら、洗濯物を入れて下さい。
- (7) 雨が降るなら、洗濯物を入れておこう。
- (8) 雨が降ってモ、水不足は解決しそうにない。

このことは、こういった假定表現が既出の談話があってはじめて有効な表現であること、すなわち既に成立している文脈と何らかの関係あるいは影響を持つという点に注目すべき表現であることを示しているように思われる。

とはいえ、假定表現に限らず、全ての断定 (assertion) をはじめとする陳述は、文脈との関係で論じられるべきであることは自明の⁽²⁾ことである。断定についての一般的な性質は Stalnaker (1978) に見られる通り、まず第一点として、ある命題を表明するものであり、第二に、ある文脈内、すなわち話し手及び相手をも含めた状況において行なわれるものであり、第三に、断定の内容は話し手や発話の場所といった文脈に負うことがあること、第四点として、断定は文脈に影響を与える、あるいは影響を与えることを目的とすることが挙げられる。この場合、相手というのは話し手によって自己の表現の理解者として意識された対者という意味で、理解行為の主体としての聴き手とは区別される。

これまで文脈という言葉は定義することなく使ってきたが、言語学、あるいは哲学において議論されてきている前提 (presupposition) や Possible World (以下 PW) との関連において、大きな問題を残している概念ではある。以後の議論のため、こういった諸概念を表わす一つのモデルを提出しておくことにする。

変形文法の枠内における焦点・前提の議論 (たとえば Jackendoff (1972)) や Strawson に始まる論理的前提に見られるような前提の概念では、たとえば(5)にはバを、(8)にはテモを使う場合、「雨が降るということは一般に水不足を解決するという帰結を導く。」という論理が何らかの意味で前提されていることを説明できない。ここでは、系 (system) あるいはパターン認識といった知識論を念頭においた枠づけをしておきたい。

ここで最も重要なのは、Feigenbaum⁽³⁾が人間と相当立ち入った会話のできるコンピュータープログラムをさして、言葉を本当の意味で理解しているのではないとした点にある。すなわち、人間が文を理解するというのは、その個々の人の過去からできてきた「概念構

造」にその文が適合したときで、コンピューターにはそういう個人的な「概念構造」はないというのである。この概念構造は、個人的な経験におけるいろいろな要素をもってできあがったネットワークの中における連想網のようなものであり、人間特有の帰納的一般化を通じてそういった要素を関係づけられた系としてとらえるパターンとして認識してきたものである。そして、この帰納的一般化は、仮説的知識→推論→確証または反証→新しい仮説的知識、という形ですすめられるが、この指示は演繹的、機械的論理ばかりで無く、人間存在特有の直観と価値観によるものでもある。このように形成された概念構造（あるいは人格）の間に言語行為が行なわれる場合、社会的存在としての人間の本質上、共通部分いわゆる共通理解を期待することができる。系としてとらえられた諸現象あるいは諸経験が共通理解として成り立つ時、社会事象であれば社会通念、言語現象であれば統語規則というように認識されるわけであり、広い意味においてのある発話の文脈の構成要素となる。また、同じ意味において、その発話のなされる時間空間的状况であるいは環境も文脈の要素とすることができる。しかし、ある発話における断定行為が影響を与える対象として文脈をとらえようとするとき、上述のような広い意味での文脈の要素の中には、その断定からの影響という点で全く無関係なもの、言い換えると、その断定が情報価値を持ち得ない系としての要素が存在することに気づく。そこで、ここでは文脈を既出の談話によって規定される枠 (frame) と考える。枠とはある概念をとりまく知識の体系全体をさすものであるが、人間の言語行為のなかでのその拡がり、演繹的、機械的に導かれるものだけでなく、直観あるいは価値観により導かれる体系である点をつけ加えておく必要がある。この文脈を固有の概念構造を持つ主体としての話し手の立場から見れば、そういった知識の体系を前提としていることになる。この前提は、話し手が真と認めかつ相手もまた真と認めているとされる知識の総体、それも前に述べた帰納的一般化により体系づけられた知識の系なのである。と同時に、談話において異なった概念構造各々にある枠が形成されてきているのだということも前提されている。この枠をPWと呼ぶならば、文脈はPWによる集合の形で存在していることになる。また、知識の総体が系をなしていることは、とりもなおさず、情報価値を持つ断定、すなわち、まともな断定から影響を受け、変化する性質のものであることを意味する。というのは、情報という概念自体が、ある系の状態を組織的に変化させるような現象を意味するからである。そしてこのような系は次に来る情報如何により、複数の変化の可能性を持っているわけであるが、断定行為とは、こういった文脈あるいは前提に付随する複数の可能性を一義的に規定してゆく作用なのである。言い換えれば、ある文脈においてその断定が含む命題内容を真と主張することを意味する。一般の断定行為においては、文脈や可能性が意識されたり、言語化されることはないのであるが、ここであつかう仮定表現は、これらを言語化したように見えるところに特徴がある。次に各仮定表現を上記の文脈のモデルとの関連において位置づけてみたい。

2. 日本語の仮定表現

(1)のなかではじめの四つの表現——「 S_1 ト S_2 、 S_1 バ S_2 、 S_1 タラ S_2 、 S_1 ナラ S_2 」——は部分的に重複する面を持っているが、ここではそれらの表現一つ一つに固有の性質を導き出してゆきたい。なお、文を発話行為のなかで見るとき、命題とその主張部分とから成立していると考えられるので、次のような略号を用いる。

p : S_1 の含む命題

q : S_2 の含む命題

$w_i(p)$: P はpossible world w_i において真

$(w)(w(p))$: P はある文脈における全てのPWにおいて真

$p \rightarrow q$: 時間的前後関係も含めて、 q が p を先行条件とすることを示す。ただし、必ずしも演繹的、機械的帰結を表すのではなく、直観や価値観による論理をも示す。

$\langle \rangle$: 主張部分を表わす。

2. 1 「 S_1 ト S_2 」

「ト」は一般に恒常的な論理関係を示すことを主な機能とする。

(9) a. 春になると、花が咲く。

b. ?来年の春になると、花が咲く。

(9 a) は「 p : (毎年) 春になること」と「 q : 花が咲く」とするとき、(10)のように示せる。

(10) $\langle (w) (w (p \rightarrow q)) \rangle$

他方、(9 b) では「 p : 来年の春になる」と「 q : 花が咲く」との論理関係は、「来年の春」が何らかの対象 (referent) を持つPWで真であることから、 $w_i (p \rightarrow q)$ となり、この場合の文法性は低い。

「 S_1 ト S_2 」が(10)のように定式化できることは、「事実」や「習慣」を先行詞とする関係節に「 S_1 ト S_2 」がよく見られることによっても支持されよう。

(11) a. 始終蘭の匂を嗅いでいるト長生きするという言い伝えがある。

b. ちか子は話に身が入ると、なほ怒り肩になる癖で…。

(寺村秀夫「連体修飾のシンタクスと意味」その3の例文より)

また次例のように S_2 が断定以外のたとえば命令、要求、決意などを表わせないことも、(10)を支持する。

(12) a. * 春になると、種をまきなさい。(命令)

b. * 仕事が終わると、お茶を入れて下さい。(要求)

c. * 雨が止むと、外出します。(決意)

一方、「 S_1 ト S_2 」が(10)のように p 、 q 間の強い論理関係を表わすことは、その対偶($\sim q \rightarrow \sim p$)という関係を相手に推論させる効果を持つ。そして、「 S_1 ト S_2 」の発話自体が命題 q の価値(良いことか悪いことか)によって警告や強い忠告を示す効果を持つことになる。

- (13) a. 手術をしないと、この患者は死ぬ。(警告：死なせないために手術をする。)
 b. 勉強をしないと、東大に入れないよ。(強い忠告：東大に入るために勉強する。)

以上の観察から、「 S_1 ト S_2 」は(10)のような論理関係を断定することを基本とし、文脈への影響は一般の断定と一致する。つまり、相手に否認されない限り、既存の文脈に組み込まれ、次の発話行為の新しい文脈の要素となるのである。この意味で、「タラ」や「ナラ」に見られるような仮定と文脈間の特徴は、典型的な「 S_1 ト S_2 」の表現には見られないと言える。

2. 2 S_1 バ S_2

日本語の仮定表現を考える時、「バ」に言及せずにおくことはできない。それほど広く用いられる表現なのである。前述の「ト」と置き換えが可能であるし、 S_2 が命令、要求、決意等を表わせるという点で後述の「タラ」とも置換できる。また後述の「ナラ」に付加されて、「ナラバ」となった場合、「ナラ」の意味ばかりでなく、論理記号で表わされる必要条件や十分条件を表わすこともできる。したがって「バ」の機能は他の仮定表現の機能全てを含むことになるので、ここで一般化することはしない。語法の記述が目的ではないからである。ただ、「バ」を伴う表現は、古風、あるいは文章語的なニュアンスを持つことを記しておく。

2. 3 「 S_1 タラ S_2 」

「タラ」は過去や完了を表わす助動詞「タ」の未然形に由来し、用言性の語句のみを導いて、主に仮説的論理を表わす。

- (14) a. 年が明けタラ、情勢が変わるかもしれない。
 b. 春になっタラ、東北を旅行します。
 c. 太郎が来タラ、帰ります。

(14)の「年」「春」「太郎」が指示する対象を持つPWにおいて、(14)のa、b、cは真となるのであるから、(15)のように定式化してみる。

- (15) $\langle w_i (p \rightarrow q) \rangle$

(15)は w_i を指定した上での p 、 q 間の論理関係を表わしているから、文脈(PWの集合)における意味論的真偽性がこういった文には関係して来ないことになる。 $(w)(w(p))$

となつてはじめて真偽値を問えるわけで、(15)は第1節で述べた帰納的一般化の過程の仮説の段階にあてはまる。従つて命題内容そのものは、文脈に何らの影響を与えてないのであるが、一方ではその発話自体が行為となるいわゆる行為遂行的機能をはたす文（一般に真偽値を持たないとされることが多い）に用いられる。たとえば、

- (16) a. 春になつたら、種をまきなさい。(命令)
 b. 仕事が終わつたら、お茶を入れて下さい。(要求)
 (cf. (12a) (12b))

2.4 「S₁ (ノ) ナラ S₂」

「(ノ) ナラ」は断定の助動詞「ダ」の未然形に由来する假定形であるが、前述の「ト」や「タラ」との比較も交えて分析してゆきたいと思う。

まず第一に、用言性の語句ばかりでなく、名詞をも導き(17a)、名詞節をマークする「ノ」を常に伴うことができる(17b)。

- (17) a. 雨ナラ、車で行こう。
 b. 雨になる(ノ)ナラ、洗濯物を入れておこう。

第二点として、時間的前後関係をも含めた命題間の直接の関係($P \rightarrow Q$)が成立しない。

- (18) a. 太郎が来るナラ、僕は帰る。
 (太郎が来る予定になっているのであれば、自分は(おそらく太郎が来る前に)帰る。)
 b. 太郎が来たら、僕は帰る。
 (太郎が来た後で帰る。)
- (19) a. 来春アメリカに行くナラ、一緒に連れて行って下さい。
 (同時に起こる事象)
 b. *来春アメリカに行つたら、一緒に連れて行ってください。
 c. 来春アメリカに行くノダツたら、一緒に連れて行って下さい。

(19c)は「タラ」を含んではいるが、断定詞の「ノダ」を伴っていることに注意したい。一般に「(断定詞)+タラ」は「ナラ」と置き換えが可能であるようだから、こういった接続形式も「ナラ」と同じ機能を持つものとして考える。では、この断定を伴う假定とは何なのだろうか。

次のようにS₁に含まれる命題が相手あるいは一般の人々による既出の命題であることがある。

- (20) a. A: 来週京都へ行く予定です。
 B: 京都へ行くノナラ、お菓子を買って来て下さい。
 b. A: 君のこの計算、少しおかしくないか。

B：僕が間違っているノナラ、あやまります。

c. A：あの店のコーヒー、おいしいそうだよ。

B：そんなにおいしいノナラ、一度連れてって下さい。

しかし、こういった既出の命題ばかりでなく、次のような話し手が新しく出す場合もある。

(21) A：ご迷惑をおかけして申しわけありません。許して下さい。

B：いや、そう簡単には許せないな。社長が直々にあやまりに来るナラ、許さないこともないがね。

以上の観察により、 S_1 に含まれる命題は、話し手が断定できない、しかし、話し手以外によって断定が可能なような性質のものであることがわかる。従って、話し手をも含めてだれもが断定可能な命題を S_1 に含む(22 a)のような文は非文法的となる。われわれの世界において、「春になる」ことは必然だからである。

(22) a. *春になるナラ、アメリカに行きます。

b. 春になったら、アメリカに行きます。

こういったことから「ナラ」を定式化してみると(23)のようになる。

(23) $\langle w_i (p) \rightarrow q \rangle$ ⁽⁴⁾

(23)では命題 p 自体が直接には q と \rightarrow で結ばれず、 p が w_i で真となることが条件となっているので、「タラ」や「ト」とちがって「ナラ」が S_1 にテンスを持つことを説明することができる。 PW は発話時点とは異なる時点という形においても成立しうるからである。

S_1 と S_2 の間には、 S_1 のテンスによって次のような発話の時点との時間関係が成り立つ。

- | | | | |
|--------------------|----------------------|--------|-------|
| (24) ⁵⁾ | S_1 | (時間関係) | S_2 |
| a. | 太郎が <u>来た</u> ナラ、… | (過去) | 帰ります。 |
| | (過去時制) | | |
| b. | 太郎が <u>来ている</u> ナラ、… | (現在) | 帰ります。 |
| | (現在時制：状態) | | |
| c. | 太郎が <u>来る</u> ナラ、 | (未来) | 帰ります。 |
| | (現在時制：動作) | | |

久野暉(1973)は(24 c)の S_1 のような現在時制：動作動詞の場合は遠い未来をさすとし、その場合 S_2 が近い未来を表わすとして、「遠い未来→近い未来」という時間的矛盾から(25 a)のような文の非文法性を説明しているが、これではほぼ同じ時間関係を持つと思われる(25 b)がなぜ非文法的でないのかを説明できないし、また(25 c)のように S_2 のほうが S_1 より後になる場合も説明できない。

- (25) a. *君がアメリカに行くナラ、僕は淋しくなるでしょう。
 b. 息子さんがアメリカにいらっしゃるナラ、淋しくなりますね。
 c. 今夜そんなに気温が下がるナラ、明日は雪になるだろう。

こういったことは、(25 a) の命題関係が「タラ」の $\langle w_i (P \rightarrow Q) \rangle$ にあうということにすぎないのであり、「 S_1 ナラ S_2 」を時間的な関係において説明しようとするのは、無意味なことのようと思われる。

(23)の $\langle w_i (P) \rightarrow Q \rangle$ では、命題 Q は直接主張部 $\langle \rangle$ に含まれるが、これは S_2 が真偽値を持つ事象を表わさず、判断、意志、決意、要求、命令を表わさなければならないことによる。

- (26) a. 太郎が来たナラ、花子は帰ったに違いない。(判断)
 b. *太郎が来たナラ、花子は帰った。(単純過去)
 (27) a. 寒くなるナラ、暖房を入れます。(意志)
 b. *寒くなるナラ、暖房が入ります。(事実の単純陳述)
 (28) a. 太郎が来るナラ、私は帰ります。(決意)
 b. *太郎が来るナラ、花子が帰ります。(単純未来)
 (29) a. 京都へ行くナラ、お菓子を買って来て下さい。(要求)
 b. *京都へ行くナラ、花子はお菓子を買って来ます。(単純未来)
 (30) a. 寒いナラ、暖房を入れなさい。(命令)
 b. *寒いナラ、暖房を入れた。(単純過去)

では(23)の $\langle w_i (P) \rightarrow Q \rangle$ で表わされる「 S_1 ナラ S_2 」は文脈とどのように関係するのだろうか。 $w_i (P)$ は命題 P がある PW において何らかの対象を持ち、真となることを表わし、この真であることを先行条件として、 Q を命題内容とする発話行為が行なわれるわけである。このことは命題 P が真とされて文脈の要素となり、前提となってゆくのかどうかについては話し手は指定していないことを示し、この点が、前提と条件の相違点となっている。一方命題 Q は w_i のスコープに入っていないから、 $(w)(w(P))$ すなわち P が真になればただちに文脈に対して断定作用を持つ。この事情は、(31)(32)にあるように、ある外界の事象「 B が立ち上がる」を意味のある動き「 P_1 ：食事に行く」と A が理解した場合、断定表現を用いるか、仮定表現を用いるかで談話の構成が違って来る点にも明らかである。

- (31) A：食事に行くナラ、ぼくも行くよ。
 { B_1 ：ああいいとも。(P_1 は真)
 B_2 ：いや、一人で行く。(P_1 は真)
 B_3 ：いや、ちょっと出かけるだけだ。
 (P_1 は偽、 「 P_2 ：出かける 」 を真とする)

(32) A: ぼくも行くよ。(P₁は真の意味で)

- { B₁: ああいいとも。
B₂: いや、一人で行く。

B₁、B₂において(P₁が真または、BはP₂を真とし、Aとの間に文脈上くいちがいがおこる)

2. 5 「S₁テモS₂」

次例のような「S₁テモS₂」は一般に逆説的仮定と呼ばれる。

- (33) a. ごはんを食べなくテモ、おなかはすきません。
b. 勉強しなくテモ、東大に入れます。
c. 年が明けテモ、情勢は変わらないでしょう。
d. 父が迎えに来テモ、帰りません。

「S₁テモS₂」のS₂が全く新しい命題を含むのでは無いことは、S₂を次のような疑問詞を含む疑問文にしてみるとわかる。

- (34) a. * ごはんを食べなくテモ、どうなりますか。
b. ごはんをたべないと、どうなりますか。
(35) a. * 勉強しなくテモ、どうなりますか。
b. 勉強しないと、どうなりますか。
(36) a. * 年が明けテモ、どうなりますか。
b. 年が明けたら、どうなりますか。
(37) a. * 父が迎えに来テモ、どうしょうか。
b. 父が迎えに来たら、どうしょうか。

S₁もまた全く新しい命題を含むのではないことは、(38 a) (39 a) (40 a) (41 a) を疑問詞を含んでいる疑問文とは解釈できない点に明らかである。

- (38) a. どうしテモ、おなかですかないのですか。
b. どうすれば、おなかですかないのですか。
(39) a. ? どうしテモ、東大に入れますか。
b. どうすれば、東大に入れますか。
(40) a. どうしテモ、情勢は変わらないのでしょうか。
b. どうしたら、情勢が変えれますか。
(41) a. どうしテモ、帰らないのですか。
b. どうしたら、帰らないでいてくれるのですか。

また2. 1 「ト」の〈(w) (w (P→Q))〉の形をとる (42 a)、(43 a) や2. 3 「タラ」の〈w i (P→Q)〉の形をとる (44 a)、(45 a) との関連において、次のようなこと

が観察される。

- (42) a. ごはんを食べないと、おなかがすきます。
 b. ?ごはんを食べないと、おなかがすきません。
 c. ?ごはんを食べなくテモ、おなかがすきます。
 (cf. (33 a) ごはんを食べなくテモ、おなかがすきません。)
- (43) a. 勉強しないと、東大に入れない。
 b. ?勉強しないと、東大に入れる。
 c. ?勉強しなくテモ、東大に入れない。
 (cf. (33 b) 勉強しなくテモ、東大に入れる。)
- (44) a. 年が明けタラ、情勢は変わるでしょう。
 b. ?年が明けタラ、情勢は変わらないでしょう。
 c. ?年が明けテモ、情勢は変わるでしょう。
 (cf. (33 c) 年が明けテモ、情勢は変わらないでしょう。)
- (45) a. 父が迎えに来タラ、帰ります。
 b. ?父が迎えに来タラ、帰りません。
 c. ?父が迎えに来テモ、帰ります。
 (cf. (33 d) 父が迎えに来テモ、帰りません。)

以上の観察から「 S_1 テモ S_2 」を定式化してみると、(33 a) や (33 b) のような場合は(46)のように、(33 c) や (33 d) のような場合は(47)のようになる。

- (46) $\langle (w) (w (p \rightarrow \sim q)) \rangle$
 前提: $(w) (w (p \rightarrow q))$

- (47) $\langle w i (p \rightarrow \sim q) \rangle$
 前提: $w i (p \rightarrow q)$

つまり、文脈またはPWにおいて $(p \rightarrow q)$ が真であるとき、すなわち、 $(p \rightarrow q)$ が期待(expectation)や通念であるとき、において、 $(p \rightarrow q)$ という論理を含む発話をする場合に「 S_1 テモ S_2 」は用いられるのである。このようにある形態素を含む形式が逆の命題が前提されるのを示すことは、Fillmore (1971) の“even”についての議論にも見られる。なお、(46)、(47)に示した性質を持つ「 S_1 テモ S_2 」の文脈への影響という点については、「ト」 $\langle (w) (w (p \rightarrow q)) \rangle$ と「タラ」 $\langle w i (p \rightarrow q) \rangle$ と同じ形式を持つことから、既に2.1および2.3で述べた説明に従いたい。

3. 結び

仮定は文脈との関連において説明されるべきであるという見地から、日本語の仮定表現の一般化を試みてきたわけであるが、これまでの定式を(48)にまとめておく。

(48) 「 S_1 ト S_2 」: $\langle (w) (w (p \rightarrow q)) \rangle$

「 S_1 タラ S_2 」: $\langle w i (p \rightarrow q) \rangle$

「 S_1 ナラ S_2 」: $\langle w i (p) \rightarrow q \rangle$

「 S_1 テモ S_2 」: $\langle w i (p \rightarrow \sim q) \rangle$

前提: $w i (p \rightarrow q)$

または $\langle (w) (w (p \rightarrow \sim q)) \rangle$

前提: $(w) (w (p \rightarrow q))$

「 S_1 ト S_2 」は恒常的論理を示すことを主とし、この意味で、他の仮定表現の持つ文脈との関連における特徴はあまり見られない。「 S_1 タラ S_2 」は文脈においてあるPWを指定し、そこでの論理関係、言い換えると仮説的論理を表わすことを主とする。「 S_1 ナラ S_2 」はあるPWの一命題を条件とするその文脈における断定を表わすことを主とする。「 S_1 テモ S_2 」はその文脈に逆の帰結を持つ命題関係を前提として含まれる表現である。

仮定もまた、前提されるPWの集合としての文脈において発話されるものである。純粹の仮定は、文脈全体においては、真偽値を持っていないという点で、前提とは異なる。またこの真偽値を持ち得ないという点で論理形式の「 $p \supset q$ 」とは異なっており、この意味からも「 $p \supset q$ 」をもって仮定表現の説明がつかないことは明らかである。

最後に、「 S_1 テモ S_2 」において前提されるとした $w i (p \rightarrow q)$ および $(w) (w (p \rightarrow q))$ は、ある命題が1で述べた「概念構造」の共通部分あるいは共通理解によることであるが、これはある文脈における期待や、社会通念になっているというふうにも言える。こういった期待や社会通念の構造を分析することは、言語学ばかりでなく心理学や情報工学においても有効なことであろう。

注

* この論文は、寺村秀夫先生の追悼の思いを込め、昭和54年、大学院生当時書き留めていたものを、複製したものである。最小限の補足事項を注に入れた。

- 1) Akatuka, N. (1985) "Conditionals and epistemic scales", *Language*, 61.3等にもくわしい議論がある。
- 2) 『言語』(大修館、1990年4月号)に、[特集]「談話研究の新展開」として談話レベルでの文の研究の重要性が示されてよる。坂原茂、久野暲、神尾昭雄、田窪行則、金水敏、飯田仁の各論文が掲載されている。
- 3) 参照文献注の長尾真(1978)を参照のこと。
- 4) 毛利可信昭和54年4月3日づけコメントによれば、「これを、 $[w i (p \rightarrow q)]$ と区別した方がよくないか。そして $[w i (p)] \rightarrow [w i (q)]$ として、 $w i (p)$ は「真」よりも意志表示、発話などであろう。」とある。
- 5) (24a)は二義になる。「太郎が来たというのが事実の場合には帰る。」という意味で過去としたのだが、「太郎が来た後で帰る。」つまり(24c)と同義ともなる。しかし、後者の意味になる

時には「ナラ」は「ノダッタラ」あるいは「ノナラ」と置き換えることができない。したがって、後者の意味での過去時制を伴う「ナラ」は「タラ」に含めて考えることとし、ここではあつかわない。また毛利教授（同上コメント）によれば、「c『太郎が来ること』が予定されているのなら同席はいやだから、今から帰る。』ともなろう。」とある。

6) 毛利教授（同上コメント）によれば、「『ても』とか、‘even if’には人間の微妙な心理（順接、逆接のとらえ方）を反映して、さらに深い問題がある。（このことはまた、——and——というか、——but——というかという問題にもつながる。）

雨が降っても行く。（降らない場合もむろん、行く。）

{ 落第したら、また来年受ければよい。
落第しても、また来年があるよ。
{ 電車に乗りおくれたら、バスで行け。
電車に乗りおくれたも、バスで行け。」

とある。

参考文献

大野晋、柴田武（編）『岩波講座：日本語 7：文法 II』（岩波書店、1977）

久野暲、『日本文法研究』（大修館、1973）

佐伯哲夫、『現代日本語の語順』（笠間叢書、1975）

沢田允茂『知識の構造』（日本放送出版協会、1969）

寺村秀夫、「語法と社会通念」（『日本語・日本文化 第八号』1978）

長尾真、「言語情報処理の過去・現在・将来」（『情報処理』vol.19、No. 2、1978）

水谷信子、「日英両語の比較—仮定法的表現を中心として」（『日本語教育 14号』、1969）

毛利可信、「情報価値についての語用論」（『英語文学世界』、1974）

「語用論と文章論」（『言語』5、1978）

「可能性の可能性」（『英語青年』、1978.6）

（訳）『意味と真偽性』B.Russell（著）（文化評論出版、1973）

渡辺慧、『認識とパタン』（岩波書店、1978）

渡辺実、『国語構文論』（塙書房、1971）

林栄一（訳）、『ブロック日本語論考』B.Bloch（著）、（研究社、1975）

Alfonso, A. (1966) *Japanese Language Patterns*, Sophia University Press.

Austin, J.L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford University Press.

Fillmore, C.J. (1971) "Entailment Rules in a Semantic Theory" *Readings in the Philosophy of Language*. (eds) J.F. Rosenberg and C. Travis.

Grice, H.P. (1975) "Logic and Conversation", *Syntax and Semantics*, vol. 3, Academic Press.

Hinds, H. & Tawa, W. (1976) "Conditions on Conditionals in Japanese", *Papers in Japanese Linguistics*, vol. 14.

Jaclendoff, R.S. (1972) *Semantic-Interpretation in Generative Grammar*, The MIT Press.

Lyons, J. (1977) *Semantics*, Cambridge University Press.

McCawley, J.D. (1977) *Everything that linguists have always wanted to know about Logic but were ashamed to ask*, Manuscript.

Stalnaker, R.C. (1978) "Assertion", *Syntax & Semantics*, vol. 9 Academic Press.

Strawson, P.F. (1952) *Introduction to Logical Theory*, Methuen & Co LTD.

vanDijk, T.A. (1977) "Context and Cognition: Knowledge Frames and Speech Act Comprehension", *Journal of Pragmatics 1*, North-Holland.